

通りゃんせ、 渡りゃんせ

2026 10.1 | 木 | ▶ 2027 1.31 | 日 |

気が
つ
け
ば
異
世
界
。

不思議なことが、起きる場所。^{ましやう しんれい}魔性や神霊、死者など「この世のもの」ではない存在や、見たことのないような「別世界」は、さまざまな「境界」を越えた時に逢うとか。人生においても日常から一歩踏み出すことで、新たな世界が開けたり奇跡的な出会いが起きるもの。人や物の移動が活発になった江戸時代、人々は越えたり渡ったりの旅を通して様々な未知との遭遇を時に畏れ、時に楽しみました。

本展では、二つの世界を架け渡す「橋」、山と里あるいは天界と下界を結ぶ「坂」、現世と神域を繋ぐ^{つな}「鳥居」、日常から非日常へと誘う「旅路」など、異世界と私たちを結ぶちょっぴり怖くて不思議な「境」の魅力を広重の作品から読み解きます。

あの橋を越えたら。あの坂の先には――。
^{あなた こなた つな あわい}彼方と此方を繋ぐ間は、人生に変革をもたらす道標。

往きつ戻りつ怖いながらも、
通りゃんせ、渡りゃんせ。

見どころ HIGHLIGHTS

異次元の
入り口は
何処に？！

この世には、不思議がいっぱい。坂、辻、鳥居や時季の変わり目など、どこが未知の世界へ繋がる「境」なのか浮世絵からこっそり教えます。

ゲート
境を守るのは、神か魔物か

異世界との境は奇妙な話が付き物。そこに現れるのは、神か魔物かー。地域に伝わる信仰や古より伝わる^{ふっとびストーリー}驚異物語に、時を忘れてしまうかも。

神秘現象も、
楽しめちゃいます！

虹に蜃気楼、海の道(トンボロ現象)^{おみわた}や御神渡り？今でもワクワクドキドキしてしまう神秘現象も、浮世絵ですぐに楽しめます！さあ、不思議な境界を巡る旅へー。

橋

渡るか、渡らぬか

川の向こうは別世界。渡りたい。けれども川幅や急流、足のすくむような断崖^{はた}に阻まれる…。抗えぬ大自然を前にした昔の人々は、橋を架けるには神や仏^{かご}の加護が必要と考えました。

死者が蘇生した一条戻橋の伝説や橋姫伝説など、二つの世界を架け渡す「橋」には不思議な話が付き物。そういえば、能舞台でも「橋掛かり」は異界への通路です。

さて、目の前の橋は、どこに繋がっているのでしょうか。

^{むさしのくに}武蔵国と^{しもうさのくに}下総国、二つの国を結ぶ「両国橋」

かつて隅田川には江戸防衛のために橋がなかったが、明暦の大火(1657)で多くの人が逃げ場を失い焼死したことをきっかけに両国橋^{めいれき}が架けられた。当初は「大橋」と呼ばれたが、西岸の武蔵国と東岸の下総国を結ぶ橋だったことから「両国橋」と名付けられた。

本図は、両国橋西詰から橋上の往來を描く。西詰にあった両国広小路は、茶店や見世物小屋が並ぶ江戸随一の盛り場であった。橋の下にも様々な舟が行き交い、賑わいを伝えている。



名所江戸百景 両国橋大川ばた

坂と峠

この坂を登れば

上り坂に下り坂、登りつめた先の高い峠。行く先の見えぬ坂道は、進むことへの不安と期待が交錯するもの。一説に「坂」は「境」に由来し、異なる空間を分けるものと考えられていました。日本神話に登場する「黄泉比良坂」は、死者のいる黄泉国との境として描かれます。坂や峠は「山と里」や「天界と下界」の通い路で、鬼や天狗などに遭遇しやすいとか。心してお進みください。

高台の武家地と低地の町人地を結ぶ坂

武蔵野台地の東端にある赤坂は起伏に富んだ地域で、武家屋敷が並んでいた。江戸時代、武家地は高台にあり、町人は低地に集まり「下町」が形成されていた。坂はその二つの地域をつなぐとともに、境界でもあった。本図は雨に霞む赤坂の景色を描く。溜池周辺の桐畑や料理屋、その奥には赤坂御門へ続く坂道を往来する人影が見える。溜池の北側には、紀州徳川家の屋敷があった。現在は、石垣のみが赤坂御門の名残を伝えている。



二代歌川広重
名所江戸百景 赤坂桐畑雨中夕けい

村境と辻

道祖神やお地蔵さん

「ここから先は行かないで」、と母に言い聞かされた幼少期の記憶。生活圏から一歩踏み出した外界は、何が起こるか分かりません。集落の出入り口にあたる「村境」や「辻」には、外からの魔物や疫病神の侵入を防ぐために、道祖神や地蔵が祀られました。同時にここは人通りが多く、露店や茶店が並び、演芸や辻説法などで賑わう交流の場所でもありました。つい楽しくて長居してしまうからご用心。



国境の休憩場所、その名も「境木立場」

保土ヶ谷を出ると海沿いを離れ、いくつもの急坂が続く内陸を歩く。江戸を出て最初の難所と言われた権太坂の急坂を越えた先には、境木立場(休憩所)があった。ここは武蔵と相模の国境にあたり、そのしるしとして木の杭(異説に樺)があったことが地名の由来という。本図は境木立場を俯瞰で捉える。茶店には赤提灯がぶら下がり、高台からの景色を眺めながら一服する人々に賑わう。立場名物の牡丹餅に舌鼓を打っているのかもしれない。

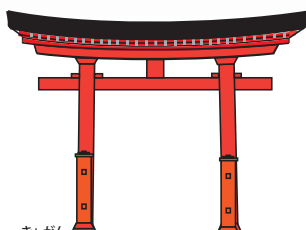


豎絵東海道
五十三次名所図会 五
程か谷 境木立場鎌倉山遠望

とり い し め なわ 鳥居・注連縄

エリア 神の領域

鳥居をくぐると感じる厳かな神気。古来日本人は自然の中に神を感じ、生かされる幸せに感謝をしつつ大切にまつ祀ってきました。神が宿ると信じられた山や森、巨石や滝などには祭壇さいだんが設けられ、それらはやがて神社になりました。鳥居とりいや注連縄しめなわは、いわば神域しんいきと現世うつしよを隔てる目印。穢れけがを祓はらう鳥居をくぐれば、そこはもう至上の聖域さんくチュアリなのです。



し め なわ しよびよう 注連縄が守る、諸病が治ると評判の滝

日本では古くより神は自然そのものに宿るとされ、古木や巨岩、滝などは神聖な場所であった。そこが神域であることを示すため、また神域と俗界そくかいを隔てる結果として注連縄が張られた。

本図は正受院(東京都北区滝野川)の境内にあった「不動の滝」を描く。

正受院を開いた僧侶が本堂裏手の石神井川から不動明王像をすくい上げ、滝の側に安置したことが滝の名の由来という。注連縄が張られるこの滝は病気が治ると評判で、納涼も兼ねて人々で賑わった。



名所江戸百景 王子不動之瀧



参考作品(復刻) 京都名所之内 嶋原出口之柳

くるわ 廓

のが 逃れられぬ、離れられぬ



がいけい へだ
外界と隔てられた特異な空間くるわ「廓」。

堀や塀で周囲をぐるりと囲われ、特殊なしきたりや言葉遣いなど独特の文化が生まれた別世界。

江戸吉原よしわらや京都島原しまばらをはじめとする遊廓ゆうかくは、知識人が集う社交の場でもあり、江戸文化の発信地でした。その出入口は、ただ一か所「大門」のみ。

離れられぬ遊客、ここから逃れたい遊女。

双方の気持ちがか絡まりあう門の先は、極楽ごくがいでしょうか、苦界でしょうか。

顔見たさに また此処へ —— 地唄「出口の柳」

京都の島原遊廓は豊臣秀吉の公認を得て「二条柳町」として始まり、移転を重ねたのち寛永18年(1641)に現在の地に移された。この時から四方に溝を掘り、出入口は「出口」と呼ぶ一か所に限定した。三大遊廓の中でも、島原は上品で格式を重んじる雰囲気があったという。

本図は島原遊廓の大門を描く。右端にある「出口の柳」は帰る客が別れを惜しむため「見返り柳」とも呼ばれた。この門は夢と現実を分ける境界だったのだろう。



神秘現象

消えたり、現れたり

世の中に時として現れる不思議な自然現象。

雨上がりの虹、幻のように揺らぐ^{ゆ しん き ろう かんちよう}蜃気楼、干潮になると現れる海の道、

氷の筋が湖面を走る御神渡りなど、人知を超えた現象は数知れず。

科学が仕組みを解明している現代であっても、神秘を感じずには
いられません。ほら、海が左右に割れて一筋の道が見えてきました。

神秘の扉を開くかどうかは、あなた次第です！

夢と現が重なる^{うつつ しん き ろう}蜃気楼

蜃気楼は大気中の光が屈折し、遠方の景色や物体が^{あらわ}現れる自然の神秘現象。

「蜃気楼」の呼称の由来は、大蛤(蜃/竜の一種とも)が^{おほはまぐりしん}氣を吐くと幻の^{は まぼろし ろうかく}楼閣が
現れるとされた伝説による。桑名・四日市(三重県)は、春先に蜃気楼が見ら
れる名所として知られていた。

本図は風景を^{みなと}広重、手前の人物を三代豊国が描く。四日市湊の遠く沖合に、
異国の楼閣に似た建物が幻のように淡く現れている。蛤の名産地でもある
桑名や四日市は、蜃気楼を伴いよく絵画に描かれた。



雙筆五十三次 四日市 那古浦蜃気楼

時と季の間

黄昏時や季節の変わり目

暮れなずむ空に覚える、夢か現か分らなくなる感覚。「黄昏時」は
昼と夜の境界で、「あれは誰？」を意味する「誰そ^{た かれ}彼」に由来します。

また「季節の変わり目」も、不思議な世界に通じる境界。

歳神が^{としがみ ごうりん}降臨する「大晦日」、祖霊が^{おおみそか}帰ってくる「お彼岸」は、

生きていることへの感謝を思い出させてくれます。

仏教では悟りの境地を「彼岸」というとか。

煩悩や迷いがあるこの世も、愛おしいですけれどね。



参考作品(復刻) 保永堂版東海道
東海道五拾三次之内 沼津 黄昏図



誰に出逢うかわからぬ時間の境

昼から夜へと移り変わる夕暮れの刻「黄昏」。薄暗くて人の見分けが
難しく、「あの人は誰か」という意味の「誰そ^{た かれ}彼」に由来するという。
また世の中の輪郭が溶けて不安な状態から、何か大きな禍^{わざわい}が起きる
「大禍時」や魔物と遭遇する「逢魔時」とも呼ばれ、美しくも恐ろしさを含んだ時間であった。

「保永堂版東海道」は、沼津宿の街道を描く。黄昏時の道を歩く旅人
たちは、姿がはっきりとは見えずお互いの気配のみを感じているの
かもしれない。

「^{つたぎちばん}鳶吉版東海道」も、黄昏時の御油宿の様子を描く。16町(1.7km)程
しか離れていない御油と赤坂では、宿場間で客^{うば}を奪い合い、旅籠の
客引きも激しかった。薄闇の中で留女たちに袖を引っ張られる旅人
たちの、恐怖にも似た感情まで伝わってくる。



鳶吉版東海道 東海道廿六 五十三次之内 御油

道

旅は未知との遭遇だ！

「一生に一度は見たい絶景」「死ぬまでに行きたい秘境」といった本が人気の昨今。未知だからこそ、人は冒険に憧れるものです。旅が盛んになったとはいえ、生まれ育った集落から出ずに一生を終える人がまだまだ多かった江戸時代。死を覚悟してまでも踏み出した旅は、かけがえのない時間だったはず。人生を変えてしまうかもしれない出会いや出来事が待ち受ける「道」を、通りゃんせ、進みゃんせ。



行書東海道 東海道五十三次之内 白須賀 汐見坂風景



旅にいつらばはろばろと心うれしきもの — 室生犀星「旅上」『抒情小曲集』

旅に出れば、上り坂や下り坂、風雨にさらされる日もあれば絶景に出逢う日もある。遠江に面する遠州灘は、冬は「遠州のからっ風」と呼ばれる強い季節風が吹き潮の流れも早い。そのため、海の難所として恐れられた。その一方で、白い砂浜に映える青々しい松林や雄大な太平洋の景観が人々を魅了してきた。新居宿と白須賀宿の間にある「汐見坂(潮見坂)」は、その遠州灘を見渡すことができた。「行書東海道」では、旅人たちが汐見坂からの景色を楽しむ。ここは西から江戸へ向かう際に初めて富士山が見える場所でもあった。海に背を向ける3人は、富士山に気づいたのであろう。「豎絵東海道」は、汐見坂の風景を俯瞰で描く。ぼかしで表現された海の青が美しい。海を眼下に、勾配のある坂道を人々が思い思いに行き交う。

豎絵東海道

五十三次名所図会 世三 白須賀 汐見坂風景

次回予告

ひらめき、キター 発想降臨！

2027. 2.4 | 木 |

文豪の愛した東海道【前期】

▶ 6.6 | 日 |

海あり、山あり、歌枕に豊富な伝説。

そして極めつきの、美味しい名物！

「東海道」は癒しと刺激の宝庫です。

日本の大動脈として物も人も想いも運ぶその道は、昔も今も、美を生み出す芸術家の感性を刺激し続けてきました。

徒歩から鉄道へと旅のかたちが変わった明治以降も、東海道ゆかりの文豪たちはお気に入りの宿に逗留して構想を練り、故郷への私的な慕情を作品に込めました。

本展では日本文学の名だたる文豪と各地のエピソード、文学に取り込まれた風景描写などを歌川広重や近代の版画作品とともに味わいながら、発想の源泉となった東海道の魅力を旅するように探ります。

前期は出発点・日本橋から遠州・袋井までご案内します。

江戸から近代、そして現代に生きる私たちが、時空を超えてつながる「東海道」の文学遊山。

文豪の紡ぐ言葉を心の娯楽に、東海道を想えば、住めば、旅すれば。

渾渾と湧いて止まぬは、ひらめきの泉。



行書東海道

《東海道五十三次之内 興津 田子の浦 清見か関》

夜半のねざめに鐘の音ひびきぬ。
おもへばわれは清見寺のふもとにさすらへる身ぞ。
高山樗牛「清見寺の鐘声」



関野準一郎《東海道五十三次 興津 清見寺より》

貨幣・浮世絵ミュージアム
MONEY & UKIYO-E MUSEUM

052-300-8686 担当：鏡味・那須



公式ホームページ

ご案内

- 開館時間 | 9:00~16:00 (入館は15:30まで)
- 休館日 | 祝日(10/12、11/3・23、2027. 1/11)、年末年始(12/31-1/3)
- 入館料 | 無料 (団体見学の方は事前にご連絡ください)

〒460-8660 名古屋市中区錦3-21-24 三菱UFJ銀行名古屋ビル1階

052-300-8686 <https://www.bk.muf.jp>

■駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

■催しの中止・延期・変更の可能性があります。

「Instagram (インスタグラム)」はMeta Platforms, Inc.の登録商標です。



Instagram

境界と信仰

古来、人々は「人知を超えたもの」や「未知の世界」に対して畏怖の念を抱いてきました。それらと接する境には、信仰と結びついた様々なものが見られます。

例えば「神域」には注連縄や鳥居、日常空間との境界である「村境」には道祖神や地蔵を置き、精神的な安らぎを求めて祈りました。

日本神話の境界

伊弉諾尊が黄泉の国から逃げてきた時、この世との境を千引石で塞いだ。また、「これより先は来ないように」と投げた杖から「岐神」が生まれたという。

道祖神

村境、峠などの道端にあつて外來の疫病や悪霊を防ぐ神。石に文字を刻んだものや、男女双体像がある。賽の神や道陸神、岐神とも呼ばれる。信州に多い。



葛飾北斎《富嶽百景 雲天の不二》部分
天保5,6年(1834,35)★



地蔵

冥界へ行く者を救うとされる仏。石仏として村境などに置かれ、道祖神と結びつき村の守護を担った。また、地蔵が子どもの姿で現れて地獄の鬼から子どもの魂を救う「賽の河原」の信仰も生まれた。



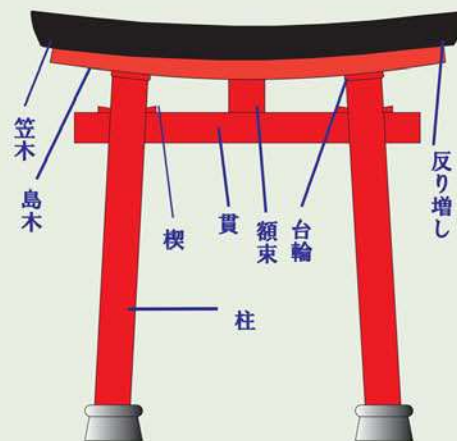
歌川国輝《賽の河原・地蔵尊》部分
東京国立図書館蔵



地蔵は、あの世とこの世の境にいるよ



川瀬巴水《旅みやげ第三集 星月夜(宮崎)》
昭和3年(1928)★



明神鳥居

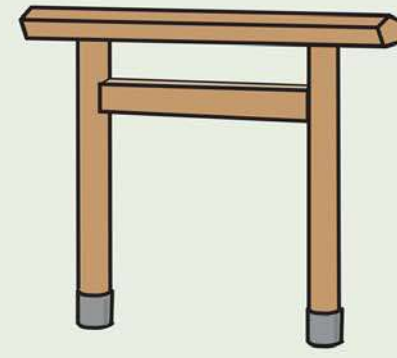
笠木の両端が、上向きに反る。貫は柱の外へ突き出す。装飾的。

伊勢神宮
(三重県)

熱田神宮
(愛知県)

神明鳥居

円柱の上に円柱(伊勢神宮は断面が五角形の笠木。直線的で素朴。



鳥居

神域と俗界の境を表す門。一説に、神に供える「鳥鶏の止まり木」が起源という。2本の柱の上に2本の横木を渡し、木、石、銅など様々な材質を用いる。神明系と明神系に大別される。

厳島神社
(広島県)



両部鳥居

柱の前後に控え柱がある。四脚鳥居ともいわれる。

日吉大社
(滋賀県)



山王鳥居

明神鳥居の上に、山に見立てた合掌形を置く。山王信仰の象徴。

伊勢斎宮
(三重県)

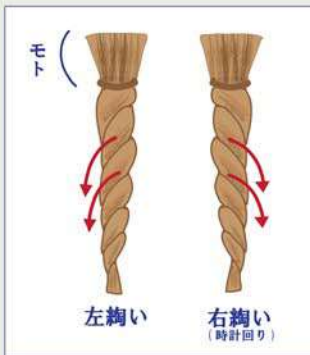


黒木鳥居

皮付きの丸木を掘り立てた、古い形式の鳥居。

注連縄

神社など神聖な場所と外界を区別する縄。稲藁を左廻いにし、四手(紙垂)を飾る。七五三縄とも。また、新年に「注連飾」として戸口に張り、歳神を迎え悪霊の侵入を防ぐ。



大根注連



『守貞謄稿』部分★

輪飾り



『守貞謄稿』部分★

輪の形に編み数本の藁を垂らす。正月の飾り。

地蔵は、あの世とこの世の境にいるよ

★はすべて国立国会図書館蔵

注連縄の起源

天照大神が天岩戸に籠った時、天手力男神が岩戸をこじ開け、再び隠れないように布刀玉命が「尻久米縄」を張った神話に由来するという。



夫婦岩の注連縄

一見ヶ浦(三重県)の夫婦岩は、二見興玉神社ゆかりの「興玉神石」と太陽を拝む鳥居の役割という。注連縄は、神の世と俗世とを隔離する結界です。



川瀬巴水《二見ヶ浦》昭和8年(1933)★

相撲と注連縄

昔は「大関」が最高位っス!



三代歌川豊国《秀ノ山雷五郎横綱土俵入之図》★

横綱の起源

「横綱」の起源は、地鎮祭に大関を招き、お祓いの地踏み(しこ踏み)を行っていたことにある。これを相撲興行に移し、寛政元年(1789)に、大関谷風と小野川が「横綱」と呼ばれる注連縄を締めて初めて土俵入りを披露したのが始まりという。

勸請縄

道を横切るように、両側の木に張り渡す



葛飾北斎《富嶽百景 村境の不二》部分
天保5,6年(1834,35)★

一文字

端から端まで同じ太さ。



鼓胴

中央が最も太く、両端が細い。



魚屋北溪《馬上の武士と神社前の二人》部分
享和元年-天保5年(1801-1834)頃
シカゴ美術館蔵

不思議な一条戻橋

一条戻橋（京都市上京区）は一条通が堀川と交差するところにあり、洛中と洛外を分ける境でもあった。内裏から見て鬼門（北東）の方角にあり、異界と通じる伝説が多く伝わる。

死者の蘇生

平安時代、父・三善清行の死を聞き息子の浄蔵が駆けつけた。葬列が一条の橋を渡ろうとするその時、浄蔵が必死に祈ると父が生き返ったため、この橋を戻橋と呼ぶようになったという。

安倍晴明と戻橋

陰陽師の安倍晴明は式神（鬼神）を自在に使っていたが、妻が式神を怖がった。そのため普段は戻橋の下に封じ、必要な時に呼び出したという。

平清盛の娘と橋占

清盛の娘・徳子が安徳天皇を出産する際、心配した母が戻橋で橋占を行った。すると安倍晴明が橋に封じた式神「十二神将」が童の姿で現れ、波に沈む運命の歌を歌ったという。

美女に化けた鬼

平安時代の武将・渡辺綱が一条戻橋で美しく若い女性に「夜道が怖いので送ってほしい」と声をかけられた。馬に乗せると、女は鬼に豹変。綱の髪を鷲掴み、愛宕山へ向かって飛ばうとする。綱は名刀・髭切で鬼の腕を斬り、北野天満宮の上に落ちて命が助かったという。



歌川国貞
《戻橋の七代目市川團十郎の渡辺綱と五代目瀬川菊之丞の鬼女》
天保4年(1833) シカゴ美術館蔵

神域・浄土と反橋

神社や寺に架かる反橋（太鼓橋）は、神域と現世、ないしは彼岸（あの世）と此岸（この世）を結ぶ入口として、人々を異空間へ誘う。

天に架かる虹の橋みたいわ！



里の家芳藏《浪華百景住吉反橋》
国立国会図書館蔵

橋占

辻風が立つ辻は異界の言葉が聞こえるとき、吉凶を占う「辻占」が古くから行われてきた。同様に橋も、「橋占」が行われた。一条戻橋は橋占の本場。



葛飾北斎『伝神開手 北斎漫画』
文化11・明治11年(1814-1878)
メトロポリタン美術館蔵

橋と異界の物語

異なる二つの世界の交流口である「橋」には、古くから不思議な話が多く伝わります。物を運ぶために、人に会うために、まだ見ぬ世界を見るために。様々な思いを抱き、人々が往来して生まれた伝承をご紹介します。

天にとどく橋

天橋立

国を生んだ伊射奈芸命が天に通おうと椅（はし）を立てたが、寝ている間に倒れて長大な岬となった。

宮津湾西岸の江尻から対岸の文珠に向かって突き出る砂嘴です



歌川広重
《六十余州名所図会 丹後 天の橋立》

八十橋

益気の里（兵庫県）に石の階（階段）があった。昔、この階は天まで届き、八十人衆（多くの）人々が天上と地上とを往来していたため「八十橋」と呼ばれている。

『播磨国風土記』より

橋姫伝説

「橋姫」は橋を守る女神として、各地に祀られているが、恐ろしくも悲しい物語が多く伝わる。

宇治の橋姫

強い嫉妬心を抱いたある公家の娘が、貴船大明神のお告げを受けて21日間宇治川に身を沈めたところ、生きながら鬼となったという。

女性を怒らせると怖いのだ〜！



《能面 般若》
東京国立博物館蔵
ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

長柄の橋姫

昔、長柄川（大阪市）になかなか橋が架けられず、人柱を立てた。人柱になった男性の妻（娘の説も）は嘆き悲しみ、川に身を投げて橋姫になったという。また、人柱に立てられた女性が橋姫となったとの伝承もある。

運命を変えた橋

五条大橋と武蔵坊弁慶

千本の太刀を集めようと、京の五条橋で辻斬りをはたらく弁慶。あと一本に迫った時、横笛を吹く牛若丸が通りかかる。襲い掛かるも返り討ちにされ、生涯家来となることを誓ったという。



歌川広重《義経一代記之内 九回 五條の橋に牛若丸武蔵坊弁慶を伏す》
文政10-天保10年(1827-39)頃 シカゴ美術館蔵

石橋の蛇の贈物

ある女性が京都の雲林院に参る途中、西院あたりの石橋を渡った。踏んだ弾みで石が外れると、蛇が現れ女性に付いていく。その晩夢に蛇が現れ、助けられた礼に良縁を約束する。その後、女性は金持ちの妻になったという。

『宇治拾遺物語』より



葛飾北斎《百物語 しょうねん》
東京国立博物館蔵
ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

時の境

古く日本人は、季節の訪れに神の力や祖霊の存在を感じとってきました。四季の巡りのおかげで農作物が実り、暮らしのリズムができると考えたのです。時間、季節、人生と、それぞれの「時の節目」を大切に思う暮らしからは、様々な感謝と祈りの風習が生まれました。

★は国立国会図書館蔵

夏越（水無月）の祓

6月（水無月）晦日は、時が改まり生命力が再生すると考えられてきた。半年間で積った罪や穢れを祓い清め、無事に過ごせたことへの感謝と残り半年の無病息災を願う「夏越の祓」の行事が各地の神社で行われてきた。

茅輪くぐり

茅や藁でつくった大きな輪。夏越の祓に神社の境内や鳥居に立て、罪穢を祓うために人々がくぐった。



葛飾北斎『富嶽百景』茅の輪の不二
天保5,6年(1834,35)★

ひとがた人形流し

ひとがた（形代）作り、身体を撫でて清め、息を三度吹きかけて川に流す。



名前と年齢を書いてね

東海太郎 六十歳

茅輪の由来

昔、武塔神（速須佐雄神）が一晚の宿を求めた。裕福な弟は断ったが、貧しい兄の蘇民将来は歓迎した。武塔神はそのお礼に、「子孫が茅輪を腰に着ければ災難、疫病から守る」と約束したという。



茅輪を腰に着けたり、蘇民将来と書いた護符を門に張ったりするよ。

み な づき 水無月

白い外郎生地（うしろぎ）に小豆を乗せ、三角形に切り分けた和菓子。京都では夏越の祓に食べる。



小豆の赤色で 魔除けパワーアップ！

としこし 年越の祓

古来、正月は歳神祖霊が家々を来訪し、福を授けてくれると捉えられていた。大晦日という「年の境」は、心身の穢れを祓い清めて姿勢を正し、神を待つ節目の時であった。

としこし 年越の市

年末に正月用品や縁起物、日用雑貨などを売る市。「歳の市」は親に似た人が出る「青森県」とか、山姥（やまばな）が現れる「長野県」といった不思議な伝承もある。



歌川広重『六十余州名所図会 江戸 浅草市』
嘉永6年(1853)★

かみもち 鏡餅

歳神に供える餅は、年末に各家で搗（う）いていた。神鏡や魂を象（かたど）って丸く平たい形にしたことから「鏡餅」と呼ばれる。これを食べると新たな年を生きる力を授かるとされた。



三代歌川豊国『暦中段尽くし』★

すすはらい すすき 煤払（煤掃）

単なる掃除ではなく、煤や塵を払うことで一年間の厄を祓い、居住まいを正して歳神を迎える。江戸時代は12月3日に一家総出で大掃除！



喜多川歌麿『武家煤払の図』部分
東京国立博物館蔵
ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)



丸餅は「年越」とも呼んだの、これが「お正月」の由来なのよ！

七ツ前は神のうち

昔は乳幼児の死亡率が高かった。七歳未満の幼子は神の子とされ、地域の宝としてわがままや非礼も許された。



「七五三」のきっかけになった風習よ

喜多川歌麿『風流子宝合』
享和2年(1802)頃 シカゴ美術館蔵

長寿を祝う「算賀」

40歳を老いの始めとして、以後10年単位で祝う「算賀」は、奈良時代頃から行われてきた。数え年61歳に行う「還暦」の祝い、江戸時代頃に普及したとされる。



四十賀、五十賀は、源氏物語にもできますぞ

尾形月耕
《源氏五十四帖 紅葉賀》部分
明治25年(1892)★



還暦は赤子の干支に戻るので、赤色を身に着けるのじゃ

昼と夜の境を越える

「夜」は悪霊が蠢くと同時に、神聖な存在も訪れる時間と考えられていた。

はなまつり しもつきかぐら 花祭（霜月神楽）

愛知県の奥三河に伝わる神楽。八百万の神を勧請し、魂の再生と更新を願って徹夜で舞う。

神と人が一体となる時間なのだ！
デーホヘ、デホヘ！



早川孝太郎著『花祭』前編 挿絵より ★

つき まち 月待信仰

十六夜、二十三夜など決まった月齢の夜に供物を供え、念仏を唱えたり酒宴を催して月を拝む。



月を待つのを口実に、一晩中遊ぼう！

歌川広重
《東都名所 高輪二十六夜待遊興之図》部分 江戸東京博物館蔵
出典：Tokyo Museum Collection
(<https://museumcollection.tokyo/works/6239560/>)